

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[1a801-03] 学校保健体育研究部会 【課題A】 口頭発表②

座長:木村 華織(東海学園大学)

15:30 ~ 15:50

[学校保健体育-A-04]

クラウチングスタート直後の地面を押す意識が中間疾走局面に与える影響の検討 (教)
中学校2年生短距離走の体育授業を対象として

*齊藤 雅記¹ (1. 山口大学教育学部)

15:50 ~ 16:10

[学校保健体育-A-05]

長距離走のICTを活用した集団的競争教材試案 (教)
チームパシュート型ペース走について

*近藤 雄一郎¹ (1. 福井大学)

16:10 ~ 16:30

[学校保健体育-A-06]

高校入学年次の柔道におけるICT導入による「分析」を通じた対話的な学びの実践研究 (発,測,教)

映像分析ツールSPLYZA Teamsを活用した運動の言語化とコミュニケーションの活性化に着目して

*橋元 真央¹ (1. 大阪教育大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 📍 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[1a801-03] 学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表②

座長:木村 華織(東海学園大学)

15:30 ~ 15:50

[学校保健体育-A-04] クラウチングスタート直後の地面を押す意識が中間疾走局面に与える影響の検討 (教)

中学校2年生短距離走の体育授業を対象として

*齊藤 雅記¹ (1. 山口大学教育学部)

本研究では中学校2年生の陸上競技短距離走の授業を対象とし、全5時間（内、測定2時間）の単元で、正しいクラウチングスタートの行い方を学習し、地面をしっかり押し力を伝えることを中心にクラウチングスタートの局面から加速局面までの指導を実施した。本研究の目的はクラウチングスタートとその直後の地面をしっかり押し力を伝える指導が中間疾走に与える影響を明らかにすることである。本研究の成果を明らかにするために、単元前後で実施した50m走の疾走能力の変化を検討することとした。検討する内容は、50m走タイムと疾走動作、調査紙調査によるクラウチングスタートの意識ポイントである。

一般的に短距離走を扱う体育の授業では疾走動作の変容を目指した指導を行い、タイムの向上を目指す授業が多くみられる。また、各局面を扱う場合はその局面ごとの動作に着目した指導を行うことが多い。本研究では、動作指導ではなく、短距離走全体に共通して求められる力を地面に伝えることを指導している。地面に力を伝えることが疾走全体にどのような影響を与えるのかを明らかにすることは、学校体育の指導において精一杯全力を出して結果もでる短距離授業を実現するための新しい視点を与えていると考えている。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

⌚ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 🏢 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[1a801-03] 学校保健体育研究部会 【課題A】 口頭発表②

座長:木村 華織(東海学園大学)

15:50 ~ 16:10

[学校保健体育-A-05] 長距離走のICTを活用した集団的競争教材試案 (教)

チームパシュート型ペース走について

*近藤 雄一郎¹ (1. 福井大学)

長距離走は体育における子どもたちが嫌う代表的な種目の一つである。そこで、本研究では「勝敗を競う楽しさや喜び」、皆が平等に学習を行ったうえで競争をするための「知識・技術」、勝敗を競う楽しさや喜びを得る過程で生じる「他者の受容や尊重」を学習内容とする長距離走教材を開発することを目的とした。研究方法として、まずスポーツ及び体育における競争の位置づけについて整理する。次に、長距離走の授業実践に関する先行研究について概観する。これらを踏まえ、研究目的に基づく長距離走教材の開発を試みる。研究の結果、まずスポーツにおける競争性については、競争は間接的・平和的でルールに規制されるものであり、他者や社会に対して利益となる社会的功利性の側面も有している。また、スポーツを運動材として扱う体育における競争性については、競争や比較による客観的結果から何を学び、次の努力への原動力としていくか、いかに自己完成に結びつけていくかという観点が重要になり、教材では全ての学習者に勝利する機会を平等に保障することが可能であることが求められる。そして、長距離走教材において競争性を位置づけていくには、自己に適した一定のペースでの走行を習得した上で、競争性を積極的に位置づけていくことで、学習者の長距離走授業に対する楽しさにより繋げていくことが可能となること、相互作用の変化に気づき、時々刻々と変化する環境（他者）に柔軟に対応する応答的身体を生み出すこと、個人が成果を得る過程において学習者間の連携や協力が生じることが考えられる。また、長距離走教材における競争の形態としては、学習者間の優劣が現前にくく、また競争に向けた準備の過程でも集団内での協同が生まれやすくなるため、個人間での競争のみならず、集団による競争の観点も必要である。これらのことから、本研究では、チームパシュート型ペース走の教材試案について提起する。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

⌚ 2025年8月27日(水) 15:30 ~ 16:30 🏫 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[1a801-03] 学校保健体育研究部会 【課題A】 口頭発表②

座長:木村 華織(東海学園大学)

16:10 ~ 16:30

[学校保健体育-A-06] 高校入学年次の柔道におけるICT導入による「分析」を通じた対話的な学びの実践研究（発,測,教）

映像分析ツールSPLYZA Teamsを活用した運動の言語化とコミュニケーションの活性化に着目して

*橋元 真央¹ (1. 大阪教育大学)

本研究は、高校入学年次の柔道授業において、映像分析ツール「SPLYZA Teams」を活用したICT導入による「分析」を通じて、生徒が自己や他者の動きを言語化し、対話的に学びを深めるプロセスを明らかにすることを目的とした。近年、体育授業においてもデジタルツールの導入による学習効果の向上が期待されている。特に、高校1年次は、生徒にとって新たな学習環境や人間関係に適応する重要な時期であり、対話的で協働的な学びの基盤を形成する絶好の機会である。柔道は身体接触を伴う競技であり、安全配慮とともに相互理解や状況把握が求められるが、実技中心の指導では自己や他者の動きを言語化し共有する機会が限定されがちである。そこで、柔道の実践場면을可視化・分析・共有することで、生徒が自他の動きを客観的に捉え、運動の言語化や他者との対話を促進し、自己理解・他者理解を深める新たな学びの形を模索することが重要であると考えた。柔道の選択授業（計14時間）では、生徒が「タグ付け」や「描き込み」を使って、自身や他者の技の映像を分析・共有する学習活動を実施した。教師は「授業取り上げタグ」を使つて的確な視点での描き込みについて共有・評価した。アンケートや自由記述から、分析活動が自己理解・他者理解を促進し、技術向上や学習意欲につながっていることが明らかとなった。また、言語化されたフィードバックを通じて生徒間のコミュニケーションが活性化し、柔道の学習が一方通行でなく協働的なプロセスとして構築されていた点が注目される。本実践は、柔道という伝統的かつ個別性の強い実技領域において、ICTを用いた「分析」と「対話的学習」を有機的に結びつけた点に新規性がある。運動の可視化・言語化を通じて、生徒の思考力や表現力を育成し、主体的・対話的な学びを実現する実践は、今後の体育科教育におけるICT活用のモデルとなることが期待される。